Tea Times

2
JUN 2002

特集

お茶の水女子大学の行方
―法人化をめぐって―

本田和子学長

2

平成14年度入学式

記事

表紙・目次 …… 1
特集　お茶の水女子大学の行方 …… 2
学部長に聞く＜文教育学部の魅力＞ …… 3
公開講座アンケート調査分析 …… 4
ジェンダー研究センター紹介 …… 5
附属学校園の近況 …… 6
お茶の水女子大学名誉博士誕生！ …… 7
入試情報 …… 8
学年歴 …… 8
編集後記 …… 8

特集

お茶の水女子大学の行方

―法人化をめぐって―

本田和子 学長

本田和子学長

国立大学が法人化される？　もちろん、本学も例外ではない。しかし、「独立行政法人」という呼称に交じって、最近は「国立大学法人」という言い方も耳にするけれど、それは同じものか？　それとも別ものか？

「国立お茶の水女子大」は、どこがどう変化して、一体、何ものになるというのだろうか？　前回の本誌を手にされた誌友の方々から、こんな声が聞こえてくるかも知れない。大学の教職員のように、日々大学業務に携わっている者たちでさえ、時として、それらの違いを明確に把握し切れないくらいなのだから、外部の方々の疑問は当然であろう。

国立大学の独立行政法人化とは、国が設置者であり主務官庁が文部科学省であることに変わりはないが、大学運営を活性化すべく独立の法人格を付与して、予算・組織・人事等の経営に関する裁量を個々の大学に委ねようという発想から出発したとされる。その背後には、行政機能のアウトソーシングや運営の効率化という行政改革的視点があったことは言を待たない。しかし、大学という高等教育機関の性格から見て、従来の独立行政法人法をそのまま適用することの不当性が指摘され、関係機関で二年以上の検討が続けられてきた。その結果、大学の特性に即した法制度が必要であるとされ、まだ仮称ではあるが、「国立大学法人法」あるいは「国立大学法」が制定され、その下での法人移管が行われることになったのである。

したがって、本学が統合再編の道を選ばず、単独で「女子大学」として存在することになれば、「国立女子大学」であることに変わりはない。ただし、名称は、恐らく「国立大学法人お茶の水女子大学」と変わるのではないか。そして、先に触れたように、経営も含めて大幅な運営権を委ねられることになろう。しかも、学外者の役員参加や民間的経営手法の導入が前提とされていることから見て、すべてを国に依存していた従来とは、大学の在り方が大幅に変化することは必至であろう。何しろ、これまでの国立大学人にとって、経営責任を担うなどということは予想だもしなかったことなのだから。前号の一隅に記載した「募金のお願い」は、その準備の一端でもある。

大学の個性化が必須とされる今日、私どもは本学をすべての女性たちのための「真摯な夢の実現の場」とすることでその独自性を主張しようとしている。「すべての女性」とは、この地球上のあらゆる女性たち……。彼女たちの資質能力の十全な開発と、彼女たちの研究者あるいは指導者としての成長を支援する……。本学が担おうとするこの大きな責務をいかにして果たすか、そのための経営力をいかに確保するか、山積する多くの課題を見据えて、教職員一同、日々、怠りない努力が要請される昨今である。

東門横に設置された学外広報用掲示板
（キャッチフレーズは学内公募によるものです。）

文教育学部の魅力

文教育学部長　教授
山本　秀行

教育学部では、多彩かつマルチな才能に恵まれた先生に、めぐりあえます。

昨年四月に着任されたA先生の研究室のドアには、楽譜のコピーが名刺がわりに掲げられています。てっきりAさんは、音楽の先生と思うかたもあるかもしれません。

しかしご専門は、日本文学、それも中世の和歌です。歌は詠まないが、歌うのは大好きとのことです。ドイツ歌曲にたいする造詣の深さは、まさにプロで、マーラーの歌曲に関する博士論文の審査では、ドイツ語の原典を持参され、ミスプリを指摘されていました。

笑う哲学者のT先生は、ジャズ・ピアノのプロです。教授会でも、哲学の原書を読みながら、指で鍵盤をなぞる練習をおこたりません。ときには、目をつむって練習にはげむあまり、そのまま居眠りに移行されることもあるようです。

個人研究室のドアを開けると、思いもかけない世界が出現するのも、本学部の魅力です。今年退官された英語学のM先生の部屋には、なんと本物の競技用自転車が壁にかけてありました。そういえば、心理学がご専門で、俳人としても知られるI先生の部屋にも、自転車が隠されているとのことです。

たまたま、日本女子大学の正門のまえで、自転車に乗ってやってくるI先生をみかけたことがあります。聞けば、昼時にはラーメンの研究に精を出しているとかで、今日は早稲田にある店を試してきたと満足そうに語ってくれました。

比較歴史学コースに昨年着任されたK先生は、日本近世史のバリバリの研究者です。先生の研究室のドアをあけると、そこは三〇年前の東大安田講堂でした。コの字型にくみあわされたロッカーの中には、火炎瓶ではなく、大量の歌舞伎のビデオがきちんとならんでいました。K先生は、女義太夫の実践者でもあるのです。今年の卒業式には、学生にまちがえられないように、紋付き袴姿で参加されていました。

左はK先生。右が竹本土佐恵師匠

こうした多彩で、マルチな才能をもつ先生がたを、放っておく手はありません。数年前から本学部では学際副専攻制の導入を考えてきましたが、本年度から、それがコア・クラスター制として全学的に実現することになりました。時代や学生が要望するテーマにそって、学部の壁をこえて、魅力的な授業を組むのが目的です。

まずは、ジェンダー系と総合環境学系が走りはじめましたが、来年度にはさらに充実するはずです。専門のほかに、もうひとつ別の知の参照系を提供すること。複眼的な思考ができるようにすること。これが、本学部の魅力であり、モットーです。

文教育学部1号館

お茶の水女子大学公開講座

これまでの総受講者数は五、六五五名

本学公開講座の歴史は、昭和四十七年から始まります。第一回公開講座のテーマは「幼児教育公開講座」で、家庭や社会における幼児の教育について、とお茶大らしい講義内容でした。この時の講師陣には、本田学長の名前も見ることができます。

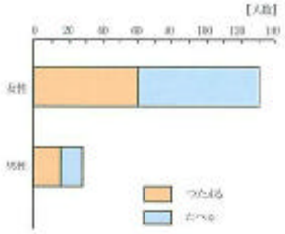
その後、毎年一～二講座のペースで続けられ、総受講者数は、五、六五五名となりました。

平成十三年度

テーマ1「つたえる」とテーマ2「たべる」

昨年度の公開講座は、「つたえる」と「たべる」という、二つの講座で開かれました。それぞれ、「つたえる」…七十五名、「たべる」…八十二名の参加がありました。

基本的に、公開講座は男女を問わずに募集していますが、男女比を見てみると、ほとんど女性となっています。



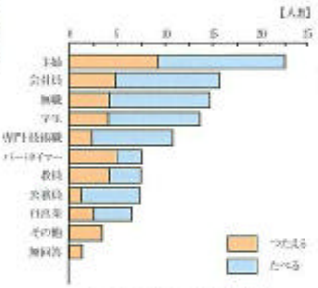
H13公開講座 男女比

受講者職種

主婦層に人気？

受講者を職種別でみると、主婦が多いことがわかります。今回は、テーマの一つが「たべる」ということもあって、主婦の方々に興味を持って頂けた結果でしょうか。

次に多いのが会社員で、自分のスキルアップが受講動機という方多いようです。

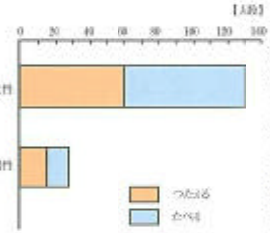


H13公開講座 受講者職種

受講年齢層

平均年齢は四十四・一歳

テーマ1「つたえる」では、三十代・四十代が、テーマ2の「食べる」では、五十代・六十代の方が多数参加しています。



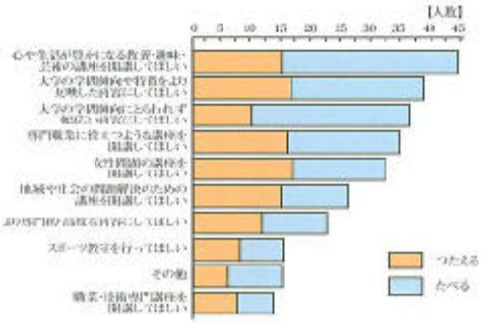
H13公開講座 男女比

前項の、受講者職種と合わせて考えると、十三年度は、家庭を守る主婦の方々の参加が多かったようです。また、親子での参加など、若い世代の方も積極的に参加して下さっています。

お茶大公開講座に望むこと（複数回答可）

要望として、「教養・趣味・芸術の講座」を望む声が多い様です。

また、今回の講座は教室での講義形式（一部軽いスポーツの講義）でしたが、少人数のゼミ形式やディスカッション、実技・実習を取り入れて欲しいとの声もありました。



お茶大 公開講座に望むこと

平成十四年度公開講座

今年度は、「知られざる東京」と「宮沢賢治」を予定しています。詳細は、お茶大ホームページ、もしくは、お茶大企画広報室までお問い合わせください。ホームページURL（http://www.ocha.ac.jp/）

企画広報室　e-mail:info@cc.ocha.ac.jp

Tel. 03-5978-5105

※今回のアンケートは、各講座修了後に、受講者に書いて頂いたものを集計しました。

（有効回答数 テーマ1…二十八名、テーマ2…六十五名）

ジェンダー研究センターの組織と活動

ジェンダー研究センター長　教授
波平　恵美子

ジェンダー研究センターは、国立大学では唯一の、ジェンダー（社会的・文化的に規定されている男女差や性別分業や男らしさ、女らしさについての認識等）研究を目的とし、平成八年に設置されました。しかし、その歴史は古く、昭和四二年に設置された大学資料室がその出発です。その後昭和五〇年に女性文化資料館となり、平成八年には現在の名称と組織となりました。

当初はお茶の水女子大学の前身であった東京女子師範学校（後に東京女子高等師範学校）以来の女子教育の資料を収集することが目的でしたが、やがて、女性に関する資料を収集し研究の拠点となっていきました。

現在、センター長一名（併任）、センター専任教授二名に加え、国外客員教員（年間一名枠）、国内客員教員、研究機関研究員（年間二名ないし三名枠）、研究支援推進員（年間一名枠）が研究活動を行っています。なお、センターの事務や国外客員教員の対応、国内外の他の研究機関との連絡など多様で大量な業務を、三名の補佐員が処理しています。

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター主催公開シンポジウム
「国際協力における大学の役割」

研究活動は、「女性と環境・開発・人口に関する研究」など十近いプロジェクトを持ち、右の研究者に加え大学内および大学外の研究協力員がメンバーとなって調査、研究、発表を行っています。平成八年以来、海外から著名なジェンダー研究者を客員教員として、一年に二名ないし三名を迎え、現在まで十五名になりました。一名の教員が滞在中に五回の夜間セミナーと一回の公開シンポジウムで講演を行い、大学外からも多数の参加者が集まります。こうした研究活動は、センターの機関誌である『ジェンダー研究』をはじめ、数多くの出版物として公開されてきました。

センターのいまひとつの活動は教育・研修であり、専任教官は大学院生の教育と共に、センターでの研修を望む若い研究者の教育と研究支援を行い、その結果次々とジェンダー研究者として巣立っています。

これまでに積み上げてきた国内外での当センターに高い評価を励みとして、一層の国際化と内容の充実を計りたいと考えています。

ジェンダー研究センターに関する問い合わせ先

（URL）http://www.igs.ocha.ac.jp/

前列左から　伊藤教授、ヴェラ・マッキー客員教授、波平センター長、舘教授

附属学校園の近況

前附属学校部長
石川　宏
十四年三月退官

「子どもの発達研究センター」が四月からスタートしました。このセンターは大学全体の共同利用機関ですが、附属学校園とはとくに深い関係があります。組織としては、「幼児教育・子育て支援」「子ども臨床」「教育みらい開発」の三部門から構成されています。活動内容は、子どもの発達過程の観察や研究、それに基づく子育て支援や臨床サービス、そして教育プログラムの開発などですが、専門的な職業人に研修の機会を提供することも検討されています。というわけで、学内外の研究者、教育関係者、院生等の出会いの場となるでしょうし、大学と附属四校園を教育研究面で緊密に結びつけるブリッジになることがとりわけ期待されます。なお、名称の「子ども」は、ここでは乳幼児から高校生までを包含していることを申し添えます。

本年二月に、附属小学校で「教育実際指導研究会」が開催されました。小学校内部にある「児童教育研究会」の主催によるものですが、この研究会は大正七（一九一八）年設立という古い歴史をもち、機関誌『児童教育』を長年にわたって定期的に刊行してきました。こうした歴史と実績があるからでしょうか、毎年全国から多数の方が小学校の研究会には参集されます。その第六十四回に当たる本年二月二十一日と二十二日の会には、二日間で延べ五五〇〇人ほどの参加者がありました。今回の研究テーマは「関わりあって学ぶ力が育つ教育内容・方法の開発」でした。これは文部科学省から研究開発校の指定をうけ、附属小学校がいま附属幼稚園と連携して取り組んでいる課題にほかなりません。参加者は初等教育関係者とくに公立小学校の先生方が多く、そうしたプロフェッショナルの厳しい視線のもとに授業を受ける小学生たち（その様子を写真でご覧ください）は、例年のことながら、さぞかし緊張したことでしょう。

教育実際指導研究会

アフガニスタン教育大臣来学

附属学校部長
田宮　兵衛

平成十四年四月十七日（水）午後二時、アブドゥル・ラスール・アミン　アフガニスタン教育大臣が、ジョン・V・クィック秘書官、オガイ・バトン　ユネスコ広報誌編集委員と共に本学に来学されました。文部科学省からは、御手洗文部科学審議官、岡谷国際協力政策室長等が随行しました。

一行は、先ず本学附属小学校、中学校、高等学校の授業等を見学し、附属小学校では、アフガニスタン教育大臣から本学児童にベストが贈呈され、本学児童からは鉛筆・ノートの他にアフガニスタン児童への手紙が大臣に手渡されました。次いで、大学会議室で附属学校関係者と懇談後、第一会議室で「アフガニスタン女子教育のための女性教員支援研修プログラム」について、プログラム策定委員等と意見交換を行いました。

お茶の水女子附属小学校生徒と握手する
アフガニスタン　アミン教育大臣　2002.4.17

お茶の水女子大学 名誉博士誕生！

お茶の水女子大学は、平成十四年三月にお茶の水女子大学名誉博士授与制度を制定しました。

このたび本制度に基づき、最初の授与者として緒方貞子氏、ニュスライン＝フォルハルト氏、柳澤桂子氏の三名を決定しました。

名誉博士は、優れた専門的営為において学術文化の発展に寄与し、かつ、本学の志向する女子教育・女性研究者の育成に貢献することにあります。

女性研究者を志向する若い女性たちにとって、極めて有効な役割モデルとなり得ることが期待されますので、三氏のこれまでの軌跡に学ぶことは、後に続く者たちにとって、大きな励ましと勇気を与えられる貴重な機会となります。このことにより、お茶の水女子大学名誉博士の称号を授与するにふさわしいものであることが認められました。

緒方貞子名誉博士

緒方貞子氏（前国連難民高等弁務官）は、国際政治学者として多くの業績を残すとともに、長年日本の大学において国際関係論の研究に従事し、上智大学国際関係学研究所長及び外国語学部長を努められました。

また、国連においては、一〇年間国連難民高等弁務官として難民への人道的支援に携われました。本年一月に開催されたアフガニスタン復興支援国際会議においては、共同議長を務められました。現在、日本政府のアフガニスタン問題担当政府代表として活躍されています。

ニュスライン＝フォルハルト名誉博士

ニュスライン＝フォルハルト博士（マックス・プランク発生生物学研究所遺伝学研究室長）は一九九五年にノーベル生理学・医学賞を受賞されています。

博士は、女性の数少ない、かつ最年少のノーベル賞受賞者として、その独自性の高い専門業績は瞠目に値いするとされています。加えて、一人のよき市民として、また、健やかな家庭と家族の維持者として、学究生活と日常の暮らしを極めて自然に両立させています。

柳澤桂子名誉博士

柳澤桂子氏（生命科学者）は、本学卒業後、発生学において実験科学者として優れた業績を挙げ、病を得てからも、最先端の科学知識の普及や医療における問題提起に取り組み、人々の啓蒙に尽力して来られました。近年ますます重要性の高まる遺伝子治療や生命倫理などの問題に対しても、生命の歴史を踏まえた生命科学者の視点から、冷静で深い洞察を加え、現代日本社会における優れた思索家の一人として活躍されています。

ノーベル賞受賞者ニュスライン＝フォルハルト女史来校！

名誉博士称号授与式及び記念講演会を平成十四年七月三日（水）に左記のとおり実施します。当日は一般の方の参加も歓迎します。

ニュスライン＝フォルハルト博士

記念講演会：十五時三〇分～十七時
お茶の水女子大学理学部3号館七〇一教室

称号授与式：十七時～十七時十五分
お茶の水女子大学理学部3号館七〇一教室

ニュスライン＝フォルハルト博士プロフィール

一九六四　ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学卒業（生物、物理、化学）
一九六八　エーバーハルト・カルルス大学修了 Diploma（生化学）
一九七三　PhD（生物学）取得 テュービンゲン大学
一九六九～七四　マックス・プランクウイルス研究所研究員
一九七八～八〇　ヨーロッパ分子生物学研究室（EMBL）Head of group
一九八五～　マックス・プランク発生生物学研究所遺伝学研究室長

■本誌に関する「意見・ご要望・記事の掲載などは。企画広報室

■お茶の水女子大学広報誌 Tea Times
平成14年6月25日発行

■編集委員／秋山 光文（主幹、文教育学部）
西村 光鳳（企画広報室長）

■問い合わせ先／お茶の水女子大学企画広報室 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL03-5978-5105 FAX03-5978-5830

■印刷
㈱プリントボーイ

平成14年度 お茶の水女子大学

～入学試験情報～

学部入学試験実施状況

平成14年4月9日
（推薦入学、帰国子女を除く）

学部	学科等		（前期）募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	倍率	入学者数
文教育学部	人文科学科		32	122	118	39	3.01	33
	言語文化学科		57	196	194	76	3.44	63
	人間社会科学科		36	77	76	30	2.53	34
	芸術・表現行動学科	舞踊教育学	32	56	54	15	4.67	15
		音楽表現	5	23	23	4	4.60	6
	計		136	474	465	172	3.49	151
理学部	数学科		33	59	56	15	4.54	13
	物理学科		34	59	48	19	3.57	19
	化学科		34	59	53	19	4.21	18
	生物学科		37	97	93	22	5.71	22
	情報科学科		23	90	88	29	3.91	27
	計		81	355	340	106	4.38	99
生活学科部	生活環境学科		42	152	150	58	3.62	32
	人間生活学科		43	201	192	56	4.57	52
	計		85	353	342	112	4.15	104
総計			302	1182	1147	388	3.91	354

※倍率は、志願者÷募集人員

学部	学科等		（後期）募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	倍率	入学者数
文教育学部	人文科学科		11	145	84	12	13.18	9
	言語文化学科		15	148	84	18	9.87	18
	人間社会科学科		5	40	14	2	8.00	5
	芸術・表現行動学科	舞踊教育学	—	—	—	—	—	—
		音楽表現	4	36	17	3	6.00	5
	計		35	357	199	43	10.20	37
理学部	数学科		3	58	44	4	19.33	4
	物理学科		3	18	18	3	6.00	2
	化学科		3	15	15	3	5.00	2
	生物学科		4	99	99	4	5.50	3
	情報科学科		7	65	65	7	9.29	4
	計		20	175	164	22	8.9	15
生活学科部	生活環境学科		9	70	54	14	8.44	13
	人間生活学科		10	92	46	11	9.20	10
	計		19	162	60	18	8.84	23
総計			74	703	443	88	9.99	75

※倍率は、志願者÷募集人員

大学院人間文化研究科博士後期課程受験状況調

（一般選抜）

専攻名	募集人員	平成13年9月入試 志願者数	受験者数	合格者数	平成14年3月入試 志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
比較社会文化学専攻	18				34	29	21	21
国際日本学専攻	11				32	31	17	17
人間発達科学専攻	15				32	23	16	16
人間環境科学専攻	16	15	15	15	7	7	7	22
複合領域科学専攻	13	3	3	3	10	9	9	11
合計	73	18	18	18	115	99	70	87

※募集定員は、一般受験者と内部進学者（いずれも外国人留学生を除く）を合わせた人数です。

大学院人間文化研究科博士前期課程受験状況調

専攻・系・コース		募集人員	平成13年9月入試 志願者数	受験者数	合格者数	平成14年2月入試 志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
言語文化専攻	日本言語文化学	32				17	16	10	10
	アジア言語文化学					10	9	5	5
	英語圏・欧州言語文化学（英語圏）					12	12	7	7
	英語圏・欧州言語文化学（言語圏）					6	6	4	3
	日本語教育					19	19	9	9
	（社会人特別選抜・日本語教育）	(5)				11	11	3	3
	計					75	73	38	37
人文学専攻	思想文化学	28				5	5	3	2
	歴史文化学					21	21	12	11
	表象文化学					6	6	2	2
	舞踊・表現行動学					9	9	6	6
	音楽表現学					17	16	6	6
	計					58	57	29	27
発達人間科学系（発達社会科学専攻）	教育科学	45				8	8	4	4
	心理学					11	10	5	4
	発達臨床心理学					129	125	15	13
	応用社会学					3	3	2	2
	社会臨床論					14	14	5	5
	（社会人特別選抜・社会臨床論）		1	1	0				
	小計		1	1	0	165	160	31	28
生活環境科学系（発達社会科学専攻）	生活政策学					18	18	8	7
	地理環境学					6	6	5	5
	開発・ジェンダー論					19	16	9	9
	小計					43	40	22	21
計			1	1	0	208	200	53	49
生活科学系（ライフサイエンス専攻）	食品科学	45	14	13	11	2	2	1	10
	栄養化学		10	10	5	3	3	2	5
	人間生活工学		4	4	4	3	3	3	7
	環境生活工学		4	4	4	1	1	1	5
	生物人類科学		1	1	1				1
	小計		33	32	25	9	9	7	28
生命科学系（ライフサイエンス専攻）	分子生物科学		25	23	16	5	5	5	15
	生命体科学		15	15	11	3	2	2	9
	小計		40	38	27	8	7	7	24
計			73	70	52	17	16	14	52
物質科学専攻	相関物質科学	23	9	9	6	2	2	2	6
	分子科学		14	13	10	3	3	3	12
	物理科学		12	11	11	4	3	3	13
	計		35	33	27	9	8	8	31
数理・情報科学専攻	情報科学	25	18	17	16				16
	応用数理		7	7	6	2	2	2	7
	数学		13	12	8	7	6	2	9
	（社会人特別選抜・情報科学）		0	—	—	1	1	1	1
	計		38	36	30	10	9	5	33
合計		196	147	140	109	377	363	147	239

平成十四年度学年歴

四月九日　入学式
四月十五日　前学期授業開始
七月二〇日　大学見学会
八月一日～九月十六日　夏期休業
八月二九日～三〇日　大学院前期課程入学試験一次
九月十二～十三日　大学院後期課程入試
十月一日　後学期授業開始
十一月九日～十一月一〇日　徽音祭（学園祭）
十一月二九日　創立記念日
十二月二四日～一月七日　冬期休業
二月六日～八日　大学院前期課程入学試験二次
二月二五～六日　学部入学試験前期日程
三月四～六日　大学院後期課程入学試験
三月十二日　学部入学試験後期日程
三月二四日　卒業式・修了式

編集後記

予定より遅くなりましたが、ようやく第2号を発行する運びとなりました。この間に、卒業生を送り新入生を迎えて華やぎを見せていたキャンパスも、ようやくいつもの落ち着きを取り戻したようです。

毎年梅雨入りの季節になると、図書館前の池に決まって親子連れのカルガモが姿を見せます。七月二〇日に実施される本学の大学見学会には、全国から多くの高校生とそのご家族が来校されますが、都心とはいえ緑豊かでまだ自然の残るキャンパスを、足非ゆっくりと散策していただきたいと思います。ひょっとすると、学内関係者でも気づかない意外な発見があるかもしれません。（秋）